

## 北海道透析医会の現況

### 久木田和丘

北海道透析医会会長を長年お務めになられた偉大な透析医の重鎮、大平整爾先生は平成 29 年 9 月 5 日ご逝去されました。非常に残念であり、今もそれが実感として湧いてはきていません。北海道透析医会は平成 30 年 1 月 25 日、ホテルオークラ札幌で臨時役員会と総会を開催し、この会で私は、大平先生の後任として、北海道透析医会の会長に選任されました。この重責を担えるか憂慮いたしますが、昔から励ましていただいた大平先生のお言葉を思い出しながらできる限り職責を全うしたいと考えます。

#### 1 北海道における透析医療の歩み

本邦の透析の歴史では昭和 30 年頃に人工腎臓が臨床使用されたようです。北海道の黎明期では、昭和 34 年に、北海道大学医学部第一外科で膜型人工内臓における体外循環の研究が始まり、同年、札幌医科大学麻酔科でコルフ型人工腎の試作と透析による中毒治療の研究が行われ、また同年、北海道大学医学部泌尿器科で木本外科式人工腎による急性腎不全の治療が行われました。その翌年には北海道大学医学部第一外科で、ポータブル型人工腎臓の試作と急性腎不全への臨床応用が行われております。まだこの頃は長期使用のバスキュラーアクセス (VA) はなく、治療は急性期疾患に対してだけでありました。

世界の透析と VA を見ると、Kolff が急性腎不全に対して回転式ドラム式人工腎臓を用いて治療に成功したのは、1945 年 (昭和 20 年) でした。当時は VA としては長期に使用するものがなく、手術により四肢の適

当な動・静脈を露出し、カテーテルを留置して施行するものであり、長期の治療は不可能でした。その後 15 年経過した 1960 年 (昭和 35 年)、Quinton と Scribner により、長期に VA として使用可能な外シャントが発表されました。これにより慢性腎不全に対する長期透析が可能となり、それが本邦でも応用されるようになりました。外シャントは血栓を形成しやすいため頻回の血栓除去が必要とされ、また抜去や感染の危険性が高いのが欠点でした。1966 年 (昭和 41 年) にその欠点を克服した Brescia と Cimino の内シャントが発表され日本でも応用されるようになり、現在の血液透析療法の隆盛を招きました。

経済的には自費でしか受けられなかった血液透析が、本邦では昭和 43 年に健康保険適応となり、多くの末期腎不全の患者の救命、生存が可能となりました。それを受けるべく同年、旭川市で石田病院が、札幌では北辰病院が透析室を開設しました。さらに昭和 45 年には岩見沢市立病院、昭和 46 年には札幌市で渡井医院、また市立三笠病院、および札幌市立病院の透析施設が開設されております。その後も増加数は若干減少したものの透析患者の増加に伴い、現在も開設されているところがあります。

北海道透析医会は昭和 54 年に発足し、初代会長は渡井医院を開設された渡井幾男先生 (昭和 54 年～平成元年)、二代会長は猪野毛健男先生 (平成元年～平成 6 年)、三代会長は今忠正先生 (平成 6 年～平成 25 年)、四代会長は大平整爾先生 (平成 26 年～平成 29 年) の諸先生が歴任されてきました。私で平成 30 年、

五代になります。

## 2 北海道透析医会の活動

### 2-1 熊本地震と胆振東部地震

北海道透析医会では近年は年に1回の総会のほか、外部講師を招請し、札幌市透析医会と合同で学術講演会を開催しております。最近は平成30年8月25日、熊本県透析施設協議会の宇土中央クリニック院長、久木山厚子院長をお迎えし、平成28年4月14日と16日に発生した最大震度7の熊本地震の顛末についてお話を伺いました。

そのお話では、電源の復活は2時間であったこと、水要因（断水、水質汚濁）は3日で回復したとの事でした。地震発生後2日目には日本透析医会を通じて、福岡県から必要であればそちらでの透析を引き受けると連絡があったことは心強かったようです。厚生労働省も近年は災害に対して敏感な対応をし、4月17日に給水船が熊本港に到着し、透析施設に優先的に給水がされたとのことでした。

ところが、あろうことかその講演会の12日後の9月6日、午前3時8分に北海道でのちに胆振東部地震と名付けられた地震がおきました。就寝中でありましたが札幌も突然の大揺れ、ギョットして起き上がりあわてて筆筒を抑えました。筆筒の転倒を心配して布団を居間に移しました。北海道勇払郡厚真町が震源とのテレビの情報で病院の崩壊はないと考えました。まもなく停電。久木山厚子先生のお話の中に、ライフラインで重要な位置を占める電気の事がありました。2時間で復旧したと聞いており、病院は自家発電で持つだろうという計算をしていました。しかし、朝7時過ぎ病院に行くときまだ停電が続いており、少々計算が狂っていたことを知りました。東日本大震災の事も思い出されました。

### 2-2 東日本大震災の記憶

東北地方太平洋沖地震と気象庁より名前をつけられた災害は、その後、津波被害と原子力発電所被害も加わり、地震とは別に、政府は東日本大震災と名前をつけました。

平成23年3月11日、金曜日、地震当日、私は東京で会議があるため東京モノレールに乗っていましたが、午後2時48分整備場駅で停車いたしました。モノレ

ール列車の横揺れがあり「あー揺れているな」程度しか思いませんでしたが、一部の人はあわてて駅に降り立ちました。半分くらいの人たちはまだ座席に座ったままで、本を読んだりしていました。1週間ほど前に娘のいる岩手で地震があったので、携帯電話をかけましたがつながりません。メールで「地震あり、そっちは大丈夫？」と入れておき、これは届くようでした。札幌の自宅への携帯もつながらず、メールで安否を聞くと盛岡は停電、ただ事ではないようです。数分たってもモノレールは動かず、乗務員の指示で駅に降りられました。駅も高いところにあるので階段をおりて改札口の近くまで降りましたが、人が多かったため一時的にと駅外に出してくれました。その後は東京の多くの帰宅難民に混ざって歩き回りました。日帰りの予定でしたから午後7時30分の航空券がとってありましたが、モノレールもストップのままで空港へも行けません。モノレールの改札口には閉鎖中の知らせが貼ってあったままでした。どこも宿泊できる場所はありませんでした。

当日歩くこと15,000歩、またモノレールの天王洲アイル方向に行きました。午後8時頃第一ホテル東京にたどり着きました。レストランでわずかに残っていたものを注文し、そのままフロントの椅子で座りこんでいました。しばらくして、ホテルのスタッフが宴会場で横になってもよい旨教えてくれ、シーツと毛布を貸してくれ一夜を明かしました。幸い次の日は帰宅できました。自分の事はその程度でした。しかしその後のニュースで、大震災であることが少しずつわかってきました。

阪神淡路大震災後、いろいろな所でその対応策が考えられていましたが、透析に携わっている私は、透析患者のことを考える必要がありました。大平整爾先生と札幌市透析医会会長戸澤修平先生、そして当院の古井秀典先生と話し合いを行い、北海道透析医会、札幌透析医会、北海道透析療法学会が合同してその件について至急対策を練りました。東北大学で宮崎真理子先生たちが寝る暇もなく、1回2時間の透析で、ほぼ1日中透析を回しているとの情報が入りました。戸澤先生が日本透析医会と密接に連絡を取り、多くの患者を北海道に受け入れることとし、その後80名の透析患者を自衛隊機で緊急避難として空輸し、札幌市内の透析施設に送り届けました。

### 2-3 胆振東部地震のその後

東日本大震災の記憶から、今回の胆振東部地震においても、停電が長引けば緊急避難の要請が必要かとも思っていました。幸いなことに約40時間で少しずつ停電は解決し、なんとか透析難民は出さずに済みました。今回は、断水は少なく9月のあまり寒くないこと

が不幸中の幸いでした。

日本透析医会は透析患者の安全確保に全力をささげ、なるべく活動を行っています。また透析患者の不利益に対しても対策を講じています。北海道透析医会もその趣意に同調して活動していけるよう努力したいと思います。